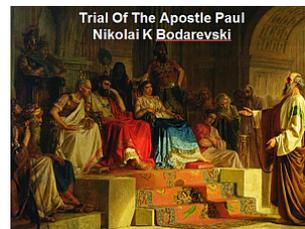


I. 導入

おはようございます。先週は使徒25章を学びましたが、最後の部分では、アグリッパ王、ベルニケ、そして総督フェストゥスの前に使徒パウロが連れ出されました。アグリッパ王がパウロの話をもっと直接聞きたいと言うと、町の要人たちも集まりました。これは個人的な面談ではありません。人々は盛装し、入場のセレモニーまで行われる公共催事でした。この場が設けられたのは、王と総督、そして地元の有力者の前でパウロが信仰の証をするためです。



パウロは何を語るのでしょうか。王はこれにどう反応するのでしょうか。その答えは、今日の聖書箇所、使徒26章にあります。ではまず、使徒26:1-11を読みましょう。

II. 聖書朗読 (使徒言行録26:1-11, 新共同訳)

26:1 アグリッパはパウロに、「お前は自分のことを話してよい」と言った。そこで、パウロは手を差し伸べて弁明した。 26:2 「アグリッパ王よ、私がユダヤ人たちに訴えられていることすべてについて、今日、王の前で弁明させていただけるのは幸いであると思います。 26:3 王は、ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じだからです。それで、どうか忍耐をもって、私の申すことを聞いてくださるよう、お願いいたします。 26:4 さて、私の若いころからの生活が、同胞の間であれ、またエルサレムの中であれ、最初のころからどうであったかは、ユダヤ人ならだれでも知っています。 26:5 彼らは以前から私を知っているのです。だから、私たちの宗教の中でいちばん厳格な派である、ファリサイ派の一員として私が生活していたことを、彼らは証言しようと思えば、証言できるのです。 26:6 今、私がここに立って裁判を受けているのは、神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからです。

26:7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んでいます。王よ、私はこの希望を抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。 26:8 神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。 26:9 実は私自身も、あのナザレの人イエスの名に大いに反対すべきだと考えていました。 26:10 そして、それをエルサレムで実行に移し、この私が祭司長たちから権限を受けて多くの聖なる者たちを牢に入れ、彼らが死刑になるときは、賛成の意思表示をしたのです。 26:11 また、至るところの会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒瀆するように強制し、彼らに対して激しく怒り狂い、外国の町にまでも迫害の手を伸ばしたのです。」

III. 教え



使徒26:2「アグリッパ王よ、…今日、王の前で弁明させていただけるのは幸いであると思います。」パウロは、アグリッパ王の前に出て弁明できる自分は幸いだと言います。このことから、パウロはアグリッパ王のためにずっと祈っていたのではないかと思わされます。パウロはテモテ第一2:2で、王や高官のために祈るようにと勧めます。ですから、おそらく日ごろから王や高官のために祈っていたでしょう。

すべての人のために祈るよう勧めた後、パウロはテモテ第一2:3-4にこう記しました。「2:3 これは、わたしたちの救い主である神の御前に良いことであり、喜ばれることです。2:4 神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。」神のみこころは、すべての人が救われることです。だからこそ、すべての人のために祈るようにとパウロは勧めました。善良な支配者のためにも、よこしまな支配者のためにも祈らなければなりません。誠実な政治家、嘘つきな政治家、良い人、悪い人、裕福な人、貧しい人、賢い人、愚かな人、皆のために同様に祈らなければなりません。聖書は私たちに、すべての人のために祈るようにと教えます。神が一人ひとりの人間を愛しておられるからです。一人残らず罪に背を向け、イエスを信じる信仰によって救われることを、神が望んでおられるからです。

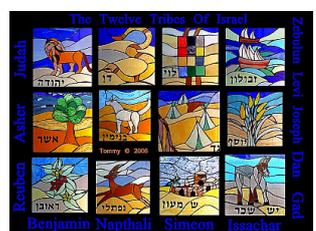
私たちはすべての人のために祈るべきです。また、機会があればいつでもイエスについて人々に伝えられるよう準備しておくべきです。ペトロ第一3:15-16はこう語ります。「3:15心の中でキリストを主とあがめなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。3:16 それも、穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようにしなさい。」アグリッパ王の前に連れ出された時、パウロは万全の態勢で臨みました。私たちも、しっかり備えをしておきましょう。

パウロは、王がユダヤ人の慣習をよく知っていることを評価し、続けて簡単な自己紹介をしました。その中で、ファリサイ派として育ったことや、若いころからの経歴がユダヤ人に知れ渡っていることを告げました。その上で、パウロは自身のおかれた状況を、旧約聖書の預言や約束と直接結びつけます。パウロは、神がユダヤ人の先祖になされた約束の実現を望んでいると語りました。これは、アブラハム、イサク、ヤコブを思い起こさせるフレーズです。

この言葉で、アブラハムになされた主の約束がアグリッパ王の心に浮かんだことでしょうか。創世記12:2-3「12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」パウロは続けて、アブラハムへの主の約束はイエスによって成就されたと明言します。すべての民族や国民のために、信仰による罪の赦しと復活の命への道をイエスが開いてくださったからです。



使徒26:7aで、パウロは続けてこう言います。「私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んでいます。」パウロは、アブラハムに与えられた約束はイスラエルと改名されたヤコブの子孫にとって今も希望の土台であると主張します。余談ですが、



イスラエルの十二部族が皆この望みを持っているとパウロが断言しているのは非常に興味深い点です。イスラエルの失われた部族について多くの書物が出版されていますが、神の視点から見れば十二部族は失われていないと、パウロは明らかに考えているのです。

パウロは、アグリッパ王をはじめとする人々の前で、ユダヤ人が神の約束の実現を大いに望んでいることを改めて強調しました。その上で、自分は神の約束を信じていることで告発されたと主張します。パウロはその場にいた人々にこう問いかけます。使徒26:8「**神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。**」パウロの問いかけで、神に焦点がおかれました。復活を論点にすると、それは不可能だと思えます。一方、神を論点とし、この神が天地を創られた創造主であり命の与え主であることを覚えるなら、神にとって不可能はないと気付かされます。

全能の神を信じるなら、死者を復活させる神の力も受け入れられるはずだと、パウロは言っているのです。ここで、パウロは復活についてある特定の事例を挙げます。それは、イエス・キリストの復活です。パウロはまず、主に出会う前は、自身もイエスの名に反対し、クリスチャンを迫害していたと語り、徐々に話の方向をそちらに向けます。使徒26:9「**実は私自身も、あのナザレの人イエスの名に大いに反対すべきだと考えていました。**」



アグリッパ王のフルネームは、ヘロデ・アグリッパ王二世です。ヘロデー族は、長年イエスの名に敵対していました。そういうわけで、アグリッパ王を敵と見なすこともできましたが、そうしませんでした。むしろ、自分自身がヘロデー族以上にイエスの名に反対していたと語り、親近感を持たせようとしていました。ステファノが石打ちされて最初の殉教者となったときすでに、後にパウロとして知られるようになったサウロは、クリスチャンを迫害する者でした。

しかしある日、迫害者サウロは考えを変えざるを得ない体験をします。この体験をきっかけに、使徒パウロとなる道へと導かれました。使徒26:12-23を読みましょう。

IV. 聖書朗読(使徒言行録26:12-23, 新共同訳)

26:12 「こうして、私は祭司長たちから権限を委任されて、ダマスコへ向かったのですが、 26:13 その途中、真昼のことです。王よ、私は天からの光を見たのです。それは太陽より明るく輝いて、私とまた同行していた者との周りを照らしました。 26:14 私たちが皆地に倒れたとき、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う』と、私にヘブライ語で語りかける声を聞きました。 26:15 私が、『主よ、あなたはどなたですか』と申しますと、主は言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。 26:16 起き上がれ。自分の足で立て。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そして、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。 26:17 わたしは、あなたをこの民

と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。 26:18 それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。』」

26:19 「アグリッパ王よ、こういう次第で、私は天から示されたことに背かず、 26:20 ダマスコにいる人々を初めとして、エルサレムの人々とユダヤ全土の人々、そして異邦人に対して、悔い改めて神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと伝えました。 26:21 そのためにユダヤ人たちは、神殿の境内にいた私を捕らえて殺そうとしたのです。 26:22 ところで、私は神からの助けを今日までいただいて、固く立ち、小さな者にも大きな者にも証しをしてきましたが、預言者たちやモーセが必ず起こると語ったこと以外には、何一つ述べていません。 26:23 つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。」

V. 教え

パウロは証で、イエスが死からよみがえられたと主張し、このことを確信する理由を説明しました。イエスが生きておられると単に言うだけでなく、劇的な出会いについて話します。パウロがダマスコに向かう途上で、よみがえられた主が現れて使命を授けられたできごとです。使徒 26:17-18で、主はパウロにおっしゃいます。「 26:17 わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。 26:18 それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。』」



パウロはアグリッパ王に告げます。言われのない告発や暴力、投獄といった苦しみはすべて、主が与えてくださった使命を従順に果たそうとした結果であると。パウロはユダヤ人にも異邦人にも同様にイエスを告げ知らせ、このことが原因で憎まれました。ユダヤ人はパウロを殺そうと何度か企みましたが、その企ては失敗に終わりました。そしてパウロはこう宣言します。使徒 26:22-23 「26:22 ところで、私は神からの助けを今日までいただいて、固く立ち、小さな者にも大きな者にも証しをしてきましたが、預言者たちやモーセが必ず起こると語ったこと以外には、何一つ述べていません。 26:23 つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。」

福音は身分にかかわらずすべての人のためであることを、パウロは改めて強調します。また、イエスの降臨は旧約聖書に則ったものだとも主張します。イエスの生誕と死、そして復活によって、数々の預言が成就しました。その一例をここに挙げます。パウロもおそらくこういった預言を思い浮かべていたでしょう。

まず、イエスの復活に関する預言です。詩篇16:9-10 「そこで、私の心は喜びあふれ、私も

安心することができます。あなたは、私を墓に放り出しておかず、あなたの聖い方を朽ちゆくままにしてはおかれませんか。」（現代訳）イエスは死んで葬られました。しかし、墓に放っておかれて遺体が腐敗することはありませんでした。三日後に死からよみがえられたからです。

次に、イエスの死に関する預言です。ここには、その死が私たちの罪の代価を支払ったことも記されています。イザヤ書53:5-6「53:5 彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。 53:6 わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。」

私たちは道を誤った羊のようです。しかし、大牧者であるイエスは、私たち一人ひとりを探し出して、救いへと連れ帰ってくださいます。パウロの話を聞いていた聴衆はこの言葉にどう反応したでしょう。



1875年に、ロシア人画家ワシーリー・スリコフがこのような場面を描きました。アグリッパ王と総督フェストゥスの顔には怒りが現れていますが、ベルニケは退屈そうに見えます。もちろん、実際に彼らがどう感じていたか知ることはできませんが、パウロの言葉が聴衆にとって深く印象に残ったことは確かでしょう。使徒26章の終盤を読むと、どのような反応であったかある程度想像できます。使徒26:24-32を読みましょう。



VI. 聖書朗読 (使徒言行録26:24-32, 新共同訳)

26:24 パウロがこう弁明していると、フェストゥスは大声で言った。「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」 26:25 パウロは言った。「フェストゥス閣下、わたしは頭がおかしいわけではありません。真実で理にかなったことを話しているのです。 26:26 王はこれらのことについてよくご存じですので、はっきりと申し上げます。このことは、どこかの片隅で起こったものではありません。ですから、一つとしてご存じないものはないと、確信しております。 26:27 アグリッパ王よ、預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」 26:28 アグリッパはパウロに言った。「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」 26:29 パウロは言った。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私ようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」

26:30 そこで、王が立ち上がり、総督もベルニケや陪席の者も立ち上がった。 26:31 彼らは退場してから、「あの男は、死刑や投獄に当たるようなことは何もしていない」と話し合った。 26:32 アグリッパ王はフェストゥスに、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ

ば、釈放してもらえただろうに」と言った。

VII. 教え

パウロの処遇を決める権威を持つ者は皆揃って、パウロが無罪であると認めました。にもかかわらず、毎回何らかの理由で釈放されませんでした。この度は、パウロが皇帝に上訴したという理由でした。皇帝への上訴は取り下げることができません。こうしてパウロは、繋がれたままローマへ護送されることになりました。しかし、このことさえも、多くの



人々の救いのために主が用いてくださいます。大切なのは、私たちが鎖につながれているか、贅沢に暮らしているかではありません。大切なのは、どんな状況でもイエスを信頼し、主に忠実でい

つづけることです。

アグリッパ王と総督フェストゥスは、パウロが法的に無罪であると確信していました。とは言うものの、パウロの言葉をすべて受け入れたわけではありません。むしろ、少なくともこの時点では、ふたりともパウロのメッセージを受け入れませんでした。使徒26:24には、フェストゥスの応えが記されています。「パウロがこう弁明していると、フェストゥスは大声で言った。『パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。』」ローマ帝国総督フェストゥスは、イエスのことも旧約聖書の預言についてもあまり知らなかったのでしょうか。フェストゥスには、パウロの証は滑稽に思えました。これに対し、パウロは自分の語った内容は「どこかの片隅で起こった」ことではない、アグリッパ王もよく知っている指摘しました。

使徒26:28は、アグリッパ王の応えが書かれています。「アグリッパはパウロに言った。『短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。』」この部分を、「もう少しで説得されるところだった」と訳した聖書もあります。アグリッパ王がパウロの証に心を動かされたが、その場で決断するのを拒んだというニュアンスがあるようです。残念ながら、私たちの知る限り、アグリッパ王はイエスを信じるという決断に至りませんでした。もしかすると、真理を語る熱心な証に感動したが、日常の生活に戻って簡単に聞いたことを忘れてしまったのかもしれない。悲しいことですが、メッセージで心を動かされながら、学んだことをすぐに忘れる人が、教会にもたくさんいるようです。

VIII. 結び

パウロは、彼の語った言葉について考えてほしいとフェストゥスとアグリッパ王に求めました。フェストゥスに、(使徒26:25)「パウロは言った。『真実で理にかなったことを話しているのです。』」王には、パウロはこう言いました。(使徒26:27)「アグリッパ王よ、預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」



イエスの福音を誰かに伝えようとする際、相手がフェストゥスのように聖書を知らない人であれば、私たちの信仰が真実で理にかなったことだと伝えなければなりません。イエスの生誕

と死、そして復活について、またイエスが成就した預言について、歴史的根拠を提示する必要があります。同時に、イエスが私たちの人生を変えてくださったこと、多くの信徒たちの人生を変えてくださったことを知らせなければなりません。

一方、アグリッパ王のように聖書の内容やイエスについての基本知識がある人に福音を伝えるなら、その証の中で決断を迫らなければならない場合もあります。イエスについての決断を先送りにするのをやめるよう求めるのです。パウロは、アグリッパ王が預言を信じていることを知っていると言いました。アグリッパ王はこれを否定しません。つまり、アグリッパ王は神について知らないから信仰を持ってないのではありません。ただ、罪深い生活を愛するが故に変わることができないのです。

私たちそれぞれの信仰の歩みを振り返ると、ベルニケのように興味がなかったことやフェストゥスのように何も知らなかったことがあるでしょう。または、アグリッパ王のように真理に抵抗したこともあるでしょう。しかし、神の恵みと聖霊の御力によって、一人ひとりがイエスを信じ、パウロのようになることを祈ります。私たちが救いの確信を得、大胆に証し、人のために懸命に祈る人になりますように。

祈りましょう。

IX. 祈り